

2015/2016 SEASON
NOVEMBER
CONCERTS

11

NOV. 8, 13, 14, 20, 21



NEW JAPAN
PHILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団

11月演奏会

11月20日、21日 トリフォニー・シリーズ

モーツァルト (1756-91)

Wolfgang Amadeus Mozart

ピアノ協奏曲第12番 イ長調 K. 414

約 25 分

Piano Concerto No. 12 in A major K. 414

- I. Allegro
- II. Andante
- III. Rondeau: Allegretto

※当初発表の曲目より変更になりました。

*

20 分

ラフマニノフ (1873-1943)

Sergey Rakhmaninov

交響曲第2番 ホ短調 op. 27

約 55 分

Symphony No. 2 in E minor op. 27

- I. Largo — Allegro moderato
- II. Allegro molto
- III. Adagio
- IV. Allegro vivace

指揮・ピアノ レオン・フライシャー
Conductor & Piano Leon Fleisher

コンサートマスター 崔(チエ)文洙
Concertmaster Munsu Choi

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

NEW JAPAN
PHILHARMONIC

TRIPHONY
SERIES
2015/2016
#550



文化庁文化芸術振興費補助金
(トップレベルの舞台芸術創造事業)

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニー・シリーズ
第550回定期演奏会

2015年11月20日(金) 19時15分
すみだトリフォニーホール

2015年11月21日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

主 催 公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
共 催 すみだトリフォニーホール

TRIPHONY

SUNTORY HALL

新・ウラシマへの道

NJP ぷり

レオン・フライシャー／指揮・ピアノ

Leon Fleisher, conductor & piano



4歳よりピアノのレッスンを始め、8歳にして最初のリサイタルを開く。翌年、偉大なピアニスト、アルトゥール・シュナーベルの下で学び始め、1944年、16歳でニューヨーク・フィルハーモニックと共演を果たす。1952年、アメリカ人として初めてエリザベート王妃国際コンクールで優勝する。以後、世界のトップ・オーケストラ、指揮者と共演し、主要なコンサートホールでリサイタルを行う。ジョージ・セル指揮クリーヴランド管弦楽団とはベートーヴェン、ブラームス、ラフマニノフのピアノ協奏曲等、レコーディングを多数行っている。

だが1965年、37歳の時に右手の2本の指が突然動かなくなってしまう。様々な治療法を試すも、彼を襲った局所的筋失症は回復せず、以後、フライシャーは指揮者としてのキャリアを歩み始める。同時に、左手ピアノのためのレパートリーを学び始めた彼は、両手で再び演奏することを決して諦めなかった。

1970年にモーストリー・モーツァルト・フェスティバルを指揮し、1973年にボルティモア交響楽団の副指揮者となる。その後、クリーヴランド管弦楽団、ボストン交響楽団、シカゴ交響楽団、サンフランシスコ交響楽団、モントリオール交響楽団等のオーケストラを指揮する。

後進の指導はフライシャーの人生において重要な位置を占めており、ピーボディ音楽院名誉教授、フィラデルフィア・カーティス音楽院教授、トロント王立音楽院教授、タンゲルウッド音楽センター音楽監督等を務めるほか、ザルツブルク・モーツァルテウム、パリ音楽院等でマスタークラスを行っている。

2000年、ボトックス療法によって、右手の機能を取り戻した彼は、両手でのピアノ演奏に再び乗り出し、指揮者・ピアニスト、両方のキャリアで再び円熟した芸を世界中で披露し続けている。

新日本フィルハーモニー交響楽団では指揮者・ピアニストとして度々共演、今回は1998年5月以来の共演となる。

「この肉体の中で、われわれはいったいなにをしているのですか」僕のそばのベッドで横になる支度をしていた紳士が言った。

その声はこちらの意見をたずねるというふうではなく、質問というよりはただ確認をもとめるような調子だった。たとえ質問だったとしても、僕にはこたえられなかっただろう。

インド人紳士のその声に対して、ひどく疲れていた「僕」は、しばらくしてから「これに入って旅をしているのではないでしようか」と言う。「肉体のことで」僕がこたえた。「抱みたいものではないでしようか。われわれは自分で自分を運んでいるといった」。

肉体とは旅する魂を運ぶ鞆のようなものだ。そんな言葉をふと思い出したのは、この本、タブッキの『インド夜想曲』（須賀敦子訳）を幾度も読んだのが、レオン・フライシャーがNJPと共演を重ねた1990年代のことだったからかも知れない。彼が右手に障害を抱えたのは1965年だが、指揮や教育への貢献のなかでも、音楽への情熱は失われるばかりか、ピアノへの愛着も渴望とともに強まってきたに違いない。NJPとも度々共演したラヴェルの「左手のための協奏曲」では、不屈の意志をもつ鉄人が、どすんと胴に響くような音楽をしていた。両手での復帰に選んだモーツァルトのイ長調 K. 414では、97年にもNJPを弾き振りした。音楽する喜びとその表現の豊穡のなかに、自由と不自由がまだ溶け合わずに隣り合っていた。

音楽する魂にとって、そもそも、ふさわしい肉体とはどんな鞆として、器のかたちとしてあるのか。演奏家にはまず楽器があり、モーツァルトやラフマニノフにとっては鍵盤楽器という乗り物があった。その天分は作品をトランクにして後世に運ばれた。魂の動きにそって器がしつらえられ、情感がふさわしい器を求め、作品に書き留められて、風雪を渡っていった。

モーツァルトもラフマニノフも当代きってのピアノの名手だった。鍵盤をパッセージで上がり下りし、疾走や跳躍をくりかえして、聴き手の心を自在に駆け巡らせた。モーツァルトが自由な戯れで無邪気に精神を開放したとすれば、ラフマニノフは重い質量と密度で圧倒した。手工の粹、戦争で加速した重工業の技という時代と様式の違いはあれ、ふたりは貴族的な、高貴な精神を保った。本日の2作の前にも悲しみや喜びはあった。感情を豊かに織りなしながら、耽溺しない地力と距離をとときには冷徹に保った。誰よりも深く情感の底を覗き込みながら、そこを歩く足どりには綿密な冷静さ、まなざしには透徹した諦観を宿すようにして。

モーツァルト／ピアノ協奏曲（第12番）イ長調 K. 414

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は、クラヴィーアの神童として知られた頃から、多くの鍵盤曲を作曲しているが、協奏曲は18歳になる直前、1773年12月に書かれたニ長調 K. 175が初めての自作となった。これ以前に7作の編曲があり、ザルツブルク時代には6曲、ヴィーン時代に17曲が遺されている。ヴィーン時代のモーツァルトは予約演奏会を生計の糧としたし、協奏曲は演奏活動の大きな軸だけに名作が多く書かれた。

イ長調協奏曲 K. 414 は、1782年冬から翌年初めにかけて書かれたへ長調 K. 413、ハ長調

K.415 との 3 曲セットの第 1 作で、前年に司教と衝突してヴィーンに移って名を高めてから最初のクラヴィア協奏曲だった。1782 年 11 月 3 日にアウエルハンマー家で行われた音楽会で初演されたと考えられている。連作は 83 年の四旬節の演奏会で披露され、2 年後にアルタリアから「作品 4」として出版された。82 年末に父に宛てた手紙には次のように書いている。「コンチェルトの予約出版には、まだ 2 曲が足りません。これらの協奏曲は難しすぎず、易しすぎない、中庸のものです。とても輝かしく、耳に心地よく、自然で間のびしたところがない。「音楽通」だけが満足感を得られるような部分が随所にありますけれど、それほど通じていない人にもなぜかしら楽しめるふうに書かれています」。83 年 1 月、ヴィーン新聞に筆者譜の予約販売広告を出したが実らず、次いでパリの出版社に持ち込んで断られていた。

1782 年の夏に結婚したモーツァルトだが、その前には敬愛する人を失う悲しみもあった。1764 年にロンドンで出会ったヨハン・クリスティアン・バッハは彼のピアノ書法に絶大な影響を与えた音楽上の父ともいえる存在だが、元日に急逝していた。モーツァルトは哀悼の意を、得意のイ長調の中間楽章に挟んだニ長調楽章での旋律引用で表している。冒頭、ソット・ヴォーチェでヴァイオリンが歌う 4 小節の主題は師の序曲「心の磁力」からのものだ。

曲は、アレグロ（イ長調、4 分の 4 拍子。協奏的ソナタ形式）、アンダンテ（ニ長調、4 分の 3 拍子。序奏つきの 2 部形式）、ロンドー アレグレット（イ長調、4 分の 2 拍子）の 3 楽章構成。
[楽器編成] ピアノ独奏、オーボエ 2、ホルン 2、弦楽 5 部。

ラフマニノフ／交響曲第 2 番 ホ短調 op. 27

ロシアのノヴゴロド近郊、貴族の家庭に生まれたセルゲイ・ラフマニノフ(1873~1943)は、ヴィルトゥオーゾ・ピアニストとして時代を画すだけでなく、ロマン派音楽の豊穡を体現した作曲家として多くの果実を遺した。ロシア的な情緒を雄大に湛え、優美な旋律で流麗な広がりをもたらすときでさえ、彼の強く構築的な意志にはそれを冷徹に見据える峻厳さがある。

ラフマニノフの悲しみには、ペテルブルク音楽院で学んでいた 9 歳のとき、姉を病で失い、農奴解放に伴う情勢変化と浪費による一家の破産、両親の離婚を経験したことも含まれる。従兄ジロティの勧めでモスクワ音楽院に移ると、ズヴェーレフ、A. ルビンシテイン、アレンスキー、タネーエフと出会った。卒業制作のオペラ『アレコ』をチャイコフスキーは絶賛し、翌 1893 年春のボリショイ劇場での初演にも駆けつけたが、11 月には突然の死を遂げる。

1897 年 3 月、新鋭の意欲作、交響曲第 1 番のペテルブルク初演は、「五人組」のキュイラの酷評を浴びた。この初演の大失敗から数年の精神疾患に陥った、というのは有名な伝聞だが、指揮したグラズノフの無理解や泥酔、そもそものがペテルブルクの長老たちの新鋭叩きの仕込みだったとも言われる。作曲は控えつつもオペラや管弦楽の指揮は続け、1900 年に着手、翌年初演したピアノ協奏曲第 2 番ハ短調がモスクワ、因縁のペテルブルクで大成功を収め、20 代後半の作曲家の自信を回復させた。同曲を献呈したニコライ・ダールの催眠

療法に助けられたという話にも、面会は音楽談義を楽しむのが主だったという見方がある。

20 世紀に入ると従妹ナターリヤと結婚し、1903 年と 07 年には娘も生まれて、幸福な家庭を築いた。1904 年からはボリショイ劇場の常任指揮者を 2 シーズン務め、06 年には 2 つの自作オペラも初演。「血の日曜日事件」など革命前夜の社会不安が募るなか、1906 年にドレスデンの町外れに別荘を借りて一家で落ち着くと、ラフマニノフは意を決して再び交響曲創作に向き合った。1907 年頭にはスケッチを上げたようだが、年末までかけて全曲のオーケストレーションを完成、翌年 2 月に自らの指揮で初演し大成功を収め、グリンカ賞の栄誉も得た。

ラフマニノフの交響曲は、亡命したアメリカで書かれたイ短調も含めて短調づくし、ピアノ協奏曲もそうだ。出世作となった 1892 年のピアノ曲も嬰ハ短調の前奏曲で、鐘の音をモチーフにしていた。彼の音楽の底辺に深く鳴り響いていたのが、ロシア正教会の鐘の音、そしてグレゴリオ聖歌の「怒りの日」^{ディエス・イレ}の旋律だった。最後の審判の恐怖を告げる「怒りの日」には終生執着したが、交響曲第 2 番でも全楽章の随所に顔を出す。まずは冒頭序奏の低弦、次いで木管にラルゴで不安げに現れ、ヴァイオリン、ヴィオラに循環する。第 2 楽章主部ではホルンの咆哮から歌われ、不穏なフーガに続く行進曲のモチーフとして歩まれる。全音階と順次進行は、同主題の特徴でもあるし、ピアノの白鍵の隣接を連想させるものだ。

本作は苦難を被った第 1 番にも増して、ベートーヴェン的な動機労作、主題の循環と連繋で、全曲を有機的に構築するとともに、ホ短調からホ長調へといった、混乱から勝利への“運命”的な行程をとる。ベートーヴェンがハ短調からハ長調へいたる第 5 番“運命”で駆使したリズム動機が、逆行リズムも含めて重用されている。ホ短調はまた、チャイコフスキーの第 5 番に象徴的な調性だった。綿密な論理構築の意向に反して、後に作曲者自身が容認したと言われる第 1 楽章提示部のくり返しのカットをはじめ、1917 年のアメリカ亡命時代からは短縮演奏が広まった。叙述にみられる装飾や挿話を、長大で冗漫な夾雑と見做し、それをヴィルトゥオーゾの流儀たる技術誇示に結びつける向きもあるようだが、どうだろう。

曲は堂々たる 4 楽章構成で、両端楽章がソナタ形式をとる。**第 1 楽章**はホ短調（アレグロ・モデラート、2 分の 2 拍子）で、長大な序奏（ラルゴ、4 分の 4 拍子）をもつ。中間楽章は、**第 2 楽章**が複合 3 部形式のスケルツォ（アレグロ・モルト、イ短調、2 分の 2 拍子）で駆け、中間部はモデラートで歌謡主題をうたう。恐怖から一転し、安息を夢想するアリアふうの**第 3 楽章**（アダージョ、イ長調、4 分の 4 拍子）は 3 部形式。天性の抒情が際立つが、ヴァイオリン、クラリネットで見れる 2 つの主題も冒頭序奏の動機から導かれたもの。中間部（ポーコ・ビウ・モッソ）の音型的な主題を交え、再現部は旋律群を織りなして高まっていく。**第 4 楽章**はホ長調（アレグロ・ヴィヴァーチェ、2 分の 2 拍子）の急速舞曲で、アダージョでの第 3 楽章の回想を経て、これまでの構成要素を凝集しながら、歓喜と生命感を炸裂させる。

[楽器編成] フルート 3（ピッコロ持替）、オーボエ 3（イングリッシュホルン持替）、クラリネット 2、バスクラリネット、ファゴット 2、ホルン 4、トランペット 3、トロンボーン 3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、グロッケンシュピール、弦楽 5 部。